

太ニガウリの半促成栽培における切り戻し時期					
[要約] 太ニガウリの半促成栽培において、 <u>8月上旬に主枝を切り戻すことにより多収</u> となり、総収量で10a 当たり 7～ 8 t 収穫できる。切り戻し後の収穫最盛期は10月下旬となり、露地作と競合しない時期に多収となる。					
担当部署	八女分場・中山間地作物チーム			連絡先	0943-42-0292
対象作目	野菜	専門項目	栽培	成果分類	新技術

[背景・ねらい]

近年需要の伸びが著しい太ニガウリは、本県においても露地作を中心に栽培面積が拡大しているが、生産量の増加により単価は低下傾向にある。そのため、露地作との競合をさける方法として無加温ハウスを利用した半促成栽培が一部で導入されている。この作型では収穫期が 1カ月早まるものの、7月下旬以降は露地作との競合により有利性が低下する。

そこで、7月下旬以降の有利性を向上させる方法として、半促成栽培における主枝の切り戻し時期が時期別収量等に及ぼす影響を明らかにし、露地作と競合しない時期に多収となる栽培技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

- 1．主枝を 8月上旬に切り戻すと、中旬切り戻しの場合よりも切り戻し後の収量が約 2 t 多くなり、総収量では 7～ 8 t 収穫できる。また、上中物収量も中旬に切り戻した場合に比べて約 1 t 多くなる（表 1）。
- 2．主枝を 8月上旬に切り戻すと 8月下旬から再び収穫可能となり、露地作の収穫が終了する10月下旬に収穫の最盛期となるため、露地作と競合しない時期に多収となる（図 1、2）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．野菜栽培技術指針に登載し、太ニガウリの栽培技術として活用できる。
- 2．切り戻しは株元から 1m 程度で行う。このとき、切り戻す位置よりも下位の節から発生した側枝をしばらく放任し、その後アーチ等に誘引する。
- 3．梅雨明け(7月中～下旬)以降は天井部の被覆資材を除去するなど高温対策を行う。また、9月中～下旬頃に被覆資材を再被覆し、生育を促すために保温する。

[具体的データ]

表1 切り戻し時期と収量および曲がり果の発生（平成14年）

作 型	上 物		中 物		下 物		収 量			上中物 収量 t	上中 物率 %	曲がり 果率 %
	果数 100本	収量 t	果数 100本	収量 t	果数 100本	収量 t	前半 t	後半 t	合計 t			
半促成												
8月上旬切り戻し	152	3.7	80	1.6	145	2.4	4.2	3.4	7.7	5.3	69	27
8月中旬切り戻し	119	2.9	60	1.2	103	1.7	4.2	1.6	5.8	4.1	71	28
露地（対照）	57	1.3	57	1.0	90	1.4	1.6	2.1	3.7	2.3	62	28

注) 1.品種：うりおとめ

2.栽培方法：半促成栽培は無加温ハウス

3.播種期：半促成=2月1日。露地=4月1日

4.定植期：半促成=3月27日。露地=5月27日

5.施肥量：N-P205-K20=30-20-30kg/10a

6.果数および収量は10a当たり

7.収量の「前半」は切り戻し前、「後半」は切り戻し後の収量を表す

8.上物：長さ30cm以上で曲がりなし、中物：長さ30cm未満で曲がりによる隙間約2cm、

下物：長さ30cm未満で曲がりによる隙間約2cm以上

9.曲がり果率：曲がりによる隙間が5cm以上のものの割合

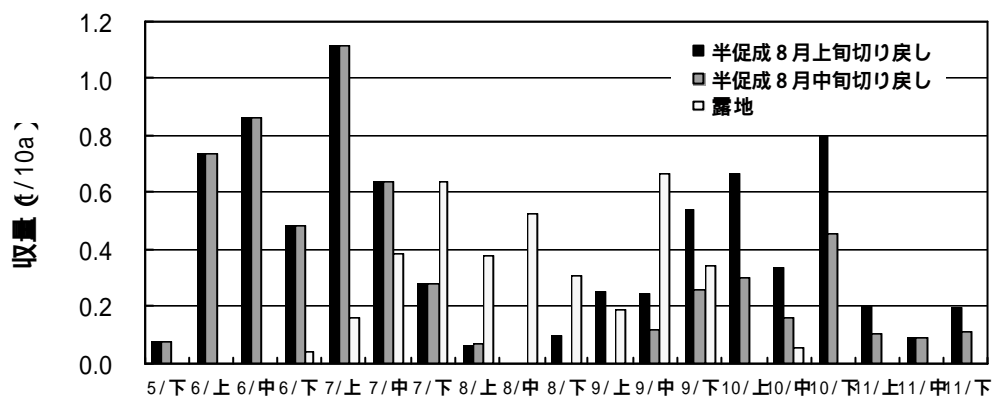


図1 切り戻し時期と時期別収量（平成14年）

注) 「5/下」は5月下旬を表す。他も同様。

作型	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	収量	
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下		
露地	播種			定植			収穫期間				約4t	
半促成	ハウス被覆 トンネル			-----				-----				約5t
半促成・ 切り戻し	ハウス被覆 トンネル			-----			約4t		切り戻し		約3t	約7t

図2 太二ガウリの半促成栽培における切り戻し栽培法

注) 半促成の育苗期は最低夜温を13℃以上に保つ

[その他]

研究課題名：太二ガウリの安定多収栽培法確立

予算区分：経常

研究期間：平成14年度（平成11～14年）

研究担当者：月時和隆、林 三徳、柴戸靖志

発表論文等：平成14年度 八女分場中山間地作物研究室試験成績概要書